

基本計画大綱（案）（3月1日時点）について委員から出された意見

小林委員

私、小林光、3月14日夜開催の基本計画審議会の第7回会合には、所属先の東大先端研の用務があつて遠隔にても参加できません。代わりに、掲題の資料への意見を事前に提出させていただきます。

最終版への反映は、会長のご判断や委員各位の合議に委ね、その結論に従いますが、まずは、当日の会合に提出いただき、委員の皆さまと共有する手配をいただき、審議会として合議し形成する意見に向けた一つのインプットとしていただけましたら幸甚です。

1. 全体の構成について

行政の計画づくりに長年携わった経験からして、掲題の資料については、従前に比べ大変分かりやすくなったとお見受けします。お陰様で、最上位の計画の大綱らしく充実し、パンチのあるものにしていただいたと感じ、また、これまでの審議の結果をよく反映していると高く評価いたします。

なお、各項目のコンテンツにつきましては若干の意見がありますところ、これらについては下記2以下の頁毎の意見をご参照ください。

2. 記載のコンテンツについて

(1) 1頁について

計画策定に当たって、という、審議会の認識や問題意識を示す前文を置くことは賛成です。(1)の第2パラの2番目の文章は、1番目で安心感の確保からさらに先に進むことの必要を訴えています。1文が6行で「…ためには、…ながら、…とともに、…うえで、…していく必要がある。」と長いだけでなく複雑な構造です。「…意欲の醸成を図る。さらに、…」といった具合に2文にしてもいいのではないのでしょうか。また、文中、「多様性の尊重の視点から」につきましては、後述の(3)の意見のとおり、「多様性の確保と発揮の視点」などの方が良いように思います。理由についてはその個所を参照ください。なお、1頁の最終行にある「住民同士が多様性を尊重し…」は認識に係る文脈ですので、これはこれでよいと思います。

(2) 4頁の基本計画の体系について

4頁全体は分かりやすいチャートだと思います。上部の表中、計画推進の指針は、計画実行の指針の方が良いと思います。述語の選択の問題ですが、計画は推進できず、計画に定める政策や事業が推進されるものと思います。計画は、具体化されることにより実行されることはできると思います。ただ、「推進」は典型的役所用語でありまして、こうした用語の使い方は、役所により流儀があるのでご判断はお任せします。

(3) 6頁の④多様性を尊重するについて

このパラの下から3行目で「多様性を尊重」と書いていますが、個人的には、尊重に留まるなら単に認識の問題だと思います。生態系では多様性こそが価値であつて意

味があるのですが、人間社会でもそうなのではないでしょうか。認識の変更だけが課題なら、多様性への偏見の打破、とかいう具合にはっきりと書いた方が分かりやすいと思います。小林としては、具体的には、尊重し、でおしまいでなく、「多様性が尊重され、その発揮が容易になるよう図る」までを書き込んだ方がよいように思いますが、いかがでしょう。④の見出しも「…を尊重し、発揮を容易にする」の方が計画らしいと思います。小林は、ジェンダーの専門家ではないので、これでは書き過ぎだ、というご判断があれば、もちろん従います。なお、このパラも6行と長いです。この観点でも、下3行の具体的なアクションを書いた部分は独立した文章とすべきと思います。

(4) 9頁の⑤脱炭素社会の構築と自然との共生について

コメントさせていただきましたが、結果、全体としてよく書き込んでくださったと評価いたします。画竜点睛ですが、3つ目のパラの4行目、行動変容を支える基盤として、ルールを明示していただきたく存じます。ルール作りは区役所以外できない大変に重要な機能です。具体的には、「…行動の変革を促す取り組みやそれを支えるルールなどの基盤の整備を進め、…」ではいかがでしょう。

(5) 10頁の(2)分野別政策について

「九つのビジョン」が初出です。また、基本計画との関係が記述されないのも不十分と思います。例えば、全文を「分野別政策」では、基本構想で示された目標や理念を踏まえ、同構想に定める「九つのビジョン」(注参照)を行政の各分野において具体化するための政策を体系的に整理するとともに、今後定める基本計画の内容に即し、各分野における課題や施策の方針・方向性を明らかにする。」のように書き換えたいかがでしょう。そして、(注)でビジョンの項目を説明ください。

(6) 11頁の計画推進の指針について

既述の(2)のとおり、計画実行の指針、計画の実行に当たり、といった表記の方が良いと思います。

羽毛田委員

「(1)世田谷区をめぐる状況」について

多くの内容が世田谷区固有ではないマクロ的な課題認識の記載となっています。その中で、「中間層の分断による二極化の進展や地域社会の分断」が住民軸・地域軸の視点での課題となっていますが表現が比喩的なので、世田谷区の実情を踏まえた具体的な記載をしてほしいと思いました。

「地域社会の分断」の事例として町会・自治会の加入率低下や地域活動参加意欲の低落傾向は挙げられると思います。

「中間層の分断による二極化の進展」はどんな事例を指すものでしょうか。

「(2)目指すべき未来の世田谷の姿」について

世田谷区の世帯構成は単身世帯がマジョリティで、今後も戸建て住宅から集合住宅への建て替えが一定進んでいけばその傾向は続くと想定されます。したがって、外部から移り住む人々に対して魅力をアピールできる「居住地として選ばれる世田谷」であることも目指すべき未来の一側面であると思います。

「人口減少や少子高齢化の進行を踏まえ、子ども・若者が住みたくなるまちを目指すことも重要である」という記載はあり、「若者」が20～30代を中心とした単身世帯も含むのであれば良いのですが、文脈上は10代の中高校生・大学生を主に意図しているように読めました。

消費と生産の近接度が高い「住民都市」であることが世田谷区の特徴ですので、「②地域経済」の項目でそのような区の地理的特徴に言及した上で、特徴を活かした地域発の社会課題解決ビジネスの振興を推進する、といった視点もあると良いのではと感じます。

涌井委員

教育・健康・福祉をご専門とされる委員並びに区民委員の方々のこの分野の多様な行政サービスの方向についての熟議は、そうした分野を専門としない論者にとり新鮮且つ実に有益な議論であった。残念なことに格差に起因した分断と孤立を深めるわが国社会の現状に鑑みて、誰をも取り残さないという哲学に添ったこうした議論から生まれる区民生活の基本的水準が明示されることは重要であるが故にこうした熟議は欠かせない。

世田谷区の熟議は、多くの公共団体が陥りやすく、且つ戦後社会が目指した「私に対する公共サービスの質の水準」を定める事こそが行政であるとする立ち位置とは全く異なる積み上げを試みており、実に好ましい。とは言えそうした熟議の成果を地域住民の平場に落とし込んだ際に必要な事、つまり行政任せという結果を可能な限り避け、区民自らが積極的にかかわりを持ち、経済的要素以外の相互の扶助の仕組みを創る事こそ、真に良質な地域社会を築くことに繋がるとの確信する。

近未来の社会は、成長ともたらされた富の再分配の議論以前に、地球上での生存の閾値（プラネタリー・バウンダリー）に関する対応策が優先されることとなろう。奇跡ともいわれる地球上の僅か 30km の厚みのバイオスフェアを、如何に現存世代のみならず将来世代も享受出来る。不断の生態系サービスを得られる状態に戻せるのかが喫緊の課題となっている（ネーチャーポジティブ）。

先進自治体を志す世田谷区が、こうした環境を巡る大課題に積極的に向き合う事はごく当然であろう。しかし言うまでも無くこの手の課題は行政だけでは、一定の解を得られない。それも SDGs の様なただ啓発を浸透させるタイプでもなく、又前述の「公共サービスの受益の水準」のような数量的目標ではない。世田谷区はどのような地域社会の構築を目指し、環境にも個人のウェルビーイングにも貢献できる社会構造をこのような手立てで実現したいとする戦略と、その帰結点としての都市像の明示が不可欠である。

その為には区がもたらす「受益」を巡る「流下・分配型」の議論ではなく。区民と行政が常に課題解決に対し、それぞれが出来る事をやる。つまり相互の行動を促す対流型の応答が必須となる。それはある意味でこれまで当然としてきた「公共」の概念の抜本の見直しを意味するのかもしれない。「公共」を「公」と「共」に分離し、「公」が多様なステークホルダーと論議を交わし得た理念を明示し、そこに至る道筋を整理・戦略化しつつ、区民も又参加と行動を前提とした「共」の再構築を行うシステムのデザインが欠かせない。

ではその「共」は何を基本に形成されるのが望ましいのであろうか。それは、ある意味での地域共同体であるが故に、自然・環境・交通・経済等の地域特性で括られた「地縁結合型社会」。つまりある種の「コモنز」に相応しい地域ユニットであって欲しい。ある種イタリアの「コムーネ」がモデルとなろう。それは土地や空間に対する地縁を重視し、地域イメージを共有できるが故に、共同化が自ずと図られる地域的な単位である。

このような区民自らが積極的に地域に向き合う事に違和感が無いユニットを積極的に行政と区民が育むことにより、価値観に大きな落差が無く、自律的行動を促す条件が構築出来る。こうしたユニットでは、所有もさることながら利用の共有が可能となる。このような社会構造が実現できれば、「災害」などの非常時への対応や、日常に潜む「分断・孤

立」といった現代社会の最も脆弱な側面をカバーし得ると思料する。議会と区民がそれぞれの立場から熟議を重ね定められた地域ユニット。そのユニット毎に異なる優先順位を投影した目標像と、それを達成（多少の地域差は併呑）する道筋を「公」としての行政が整理・明示し、「共」であるユニットが「私」としての区民が一体となり、防災活動や公園緑地・都市農地などの維持管理、弱者への手助けや見守りに参与することが、ライフスタイルとして常態化できる社会の形成を促したい。

とは言え、そうした「共の再構築」はそう容易ではない。偏に。個々の地域への愛着を基盤にしながら、区民に共有し得る目標となる都市像、理念的都市イメージを共有化できるかに係っている。

こうした都市像の共有化が可能となるならば、千年単位の世田谷という自然系の特性をスケルトン（グリーン・インフラ）として、その上に今という時代が投影した30年から50年単位のインフィリ的な生活圏をオーバーレーする姿で世田谷を捉える事が可能となる。それにより「不易流行」、即ち変えてはならぬ自然系の世田谷と、社会・経済的ダイナミズムにも対応したそれを区分でき、各々のフェーズに対する「私」と「共」と「公」の関与の在り方が定まり、現存世代と将来世代の双方に貢献する可能性が開かれる。例えば、分断と孤立が顕在化しやすい一定程度（L1クラス）の災害に、グリーンインフラ効果としての耐性と、発災後の地域住民の相互扶助といったコミュニティ効果。フィジカル・ソフト両面のレジリエンス、安心と安全性の向上に寄与できる可能性が高まる。

世田谷区は専ら東京都に抗いながらも、この20年の間、区内の災害と都市機能の両面から課題集積されていた3つと1つの区内地域（三軒茶屋・下北沢・二子多摩川+成城・烏山地区）で、地政学的立地として重要且つその地域特性が顕著であり、脆弱性も際立ち、世田谷の都市イメージを牽引する地区についての解決を模索し、遂に二子多摩川・下北沢については顕著な成果を生み出している。これは、公民連携という新たな取り組みを導入した世田谷ならではの解決の方策であり、多方面から大いに評価されている。

しかし乍ら三軒茶屋についていえば途上であり、災害や環境と経済の面から急ぎ解決が望まれ、世田谷のみならず東京全域にまで及ぶ経済的・生活圏的・防災的等の側面から多大な影響を及ぼすという認識から、急ぎその解を得て具体的検討方向を明確にする必要があると考える。また成城並びに烏山地区についてはスケルトンとしてのグリーンインフラ（自然面と防災の両面）の視点と交通便益の増進の観点から近郊農地としてのみどりの在り方の観点から、敢えて言及する。

長々と意見の開陳をさせて頂いたが、要は

- 区民参加がより良く実際性の高いものである為には、地縁共同体型のユニットを積極的に形成し、内発的に「共」として行動参加することにより、「私」としてのウェルビーイングな水準を向上させ、だれもが取り残されぬ地域構造を創成する必要がある。
- 先進自治体として最も積極的に取り組むべき事項は、バイオスフェアとしての地球環境に区が率先したネーチャーポジティブへの運動体となる事であり、例えば「みどり3×3」を念頭に置いたグリーンインフラの実装等をより積極的に推進すること等であろう。その結果が地縁結合型ユニットを担うコミュニティを実効あるものとする

可能性を拡大させる。

- 世田谷区民がウェルビーイングの基本である災害耐性を強化するために、皆が共有できる都市像を明確にすることが重要である。それは幾つかの象徴的地区が果たす都市機能を明示することにより、イメージが共有される。とりわけ三軒茶屋と成城・千歳烏山に焦点を絞りその解を模索する姿を区民に明示し、その意味を共有いただくことが、そうした都市像共有に効果的に働くと主張したい。